東京外国語大学
留学生日本語教育センター論集　31：111～124，2005

外国人児童の教科学習のための日本語指導文型

横田淳子・小林幸江

（2004. 10. 29 受）

【キーワード】　外国人児童、教科学習、教科共通文型、教科書、ポスト初期指導

1．はじめに

日本の公立学校に在籍する外国人児童生徒の問題が取り上げられるようになった初期の頃には、生活適応のためにいかに日本語を指導するかが外国人児童生徒に対する日本語指導の問題として緊急課題であった。しかし、現在では、教科学習のためにいかに日本語習得を手助けしていくかが教育現場での大きな課題となっている。

筆者らは2002年に、生活適応だけでなく将来必要となる教科学習のための日本語も視野に入れ、日本語指導教材『いっしょにほんご』を作成した。これは、初期指導の段階から、文字を使って読んだり書いたりすることによって文型を定着させることを目指したものである。しかし、『いっしょにほんご』は50時間ほどで指導することを想定した初期指導の教材で、これだけでは教科学習の中心となる教科書を読むことは到底できない。

初期指導の次の段階（ポスト初期指導）としては、教科の教科書が読めるようになるまで同学年の日本人児童が教科学習をしている在籍学級から取り出して長期間日本語指導を続ける方法もあるが、このような日本語指導は体制的に無理なだけでなく、外国人児童にとっても教科学習の場から長期に離れることになり望ましくない。初期指導の後には、日本語指導の取り出し授業は最小限にして、在籍学級で教科学習を含むさまざまな活動を日本人児童と一緒にさせ、在籍学級の教師や日本人児童を含む学校全体で外国人児童の日本語発達を支援することが望ましい。したがって、ポスト初期指導では、週に1、2時間程度の日本語指導の時間に、在籍学級での教科学習に不十分ながらもついていける日本語力をできるだけ効率よく短期間に習得させることが求められる。

語彙は学年、教科によって異なり、日本人児童も教科学習の中で概念と共に学んでいくものである。母語話者であっても常に必要な語彙を採り入れ、増やしている。一方、文型は数に限りがある上に、学年、教科に共通なものも多く、一つの文型の

使い方を習得することによって学習活動参加力が一段と増すことが期待できる。このことから、各教科に共通な文型を選び出し、次にその中から学習参加に不可欠で、教科学習を少しでも容易にするような文型を厳選することとし、小学校教科書調査を行った先行研究を検討した。その結果、教科に共通な文型、また、成人向け一般の初級日本語教科書では取り上げられているが小学校教科書（以下「教科書」）ではほとんど出てこない文型などが浮かび上がってきた。

しかし、どれを文型項目として分類し、どれを語彙や語句として分類するのかは研究者によって異なり、先行研究から指導すべき文型項目を直ちに決定することは難しいことが判明した。先行研究で教科書の文型ないし文法項目として取り上げられているものは多い。その中から教科学習のために優先的に指導すべきものを厳選するためには、教科書の文意把握上の必要度という観点から、筆者ら自身が実際の教科書を調査し、その上で、従来からの日本語教育で初級・中級項目だと考えられている文型項目を再度検討する必要があることがわかった。

2．調査教科書

調査する教科書は小学校全学年のものとした。教科学習のための日本語指導は小学校中学年以上の児童が対象になると考えているが、低学年の教科書でどのような日本語が使われているかを踏まえた上で指導項目を抽出したいと考え、教科書の日本語を全体的に調査することとした。

教科としては「算数」「生活」「理科」「社会」とし、「国語」は含めなかった。「国語」を含めなかったのは、「国語」では情報授受のための日本語だけでなく、文学作品鑑賞などを通して感情表現のための日本語も指導の対象とされているが、これは「国語」という日本語母語話者を対象とした教科の特徴であって、他の教科では主に情報授受のための日本語のみが使われていると考えたからである。筆者らは外国人児童に指導すべき文型としては、感情や感覚を正確に伝えるための文型よりは、知識を獲得していく上で必要な情報授受のための文型が優先されるべきだと考えた。

具体的な調査対象としては、よく使われている教科書であるという理由から、平成15年、東京書籍出版の教科書を選び、それぞれの教科書の中の本文、指示文、会話文を対象とし、手書きの発表文等は除いた。

『あたらしいさんすう１』

『新しい算数２上』『新しい算数２下』

『新しい算数３上』『新しい算数３下』

『新しい算数４上』『新しい算数４下』
『新しい算数５上』『新しい算数５下』
『新しい算数６上』『新しい算数６下』
『あたらしいせいかつ１・２上』『あたらしいせいかつ１・２下』
『新しい理科３』
『新しい理科４上』『新しい理科４下』
『新しい理科５上』『新しい理科５下』
『新しい理科６上』『新しい理科６下』
『新しい社会３・４上』『新しい社会３・４下』
『新しい社会５上』『新しい社会５下』
『新しい社会６上』『新しい社会６下』

ちなみに、「算数」は１年生から６年生までの教科で、６社から６種、「生活科」は1・２年生の教科で、10 社から 10 種、「理科」は３年生から６年生までの教科で、６社から６種、「社会」は３年生から６年生までの教科で、５社から５種の教科書が文部科学省検定済教科書として発行されている。

３．教科、学年別教科書の特徴

次に各教科書の全般的な特徴を述べる。

「算数」の教科書は、全学年を通じて計算式、図表が多く、相対的に文は少ない。教科書の本文等は全学年を通じて「です／ます」の丁寧体で書かれている。低学年では分かち書きが使われ、また、各単元の内容を補助するものとして、漫画やキャラクターが用いられ、その吹き出しは話し言葉で書かれている。そこでは「答は 15 だけど・・・」のような省略文、体言止め、終助詞が多く用いられている。高学年の教科書では、ほとんどの部分が丁寧体中心に書かれている。

「生活」の教科書は文字が少なく、カラーの絵や写真が１ページにいくつも組み入れられている。本文にあたるものを読んで知識を得るというよりも、絵や写真によって、子どもたちのまわりの社会や自然に関心を持たせることをねらっているためか、全部話し言葉で、それが分かち書きされている。丁寧体は調査対象とした本文、指示文、会話文の中では使われず、対象外の手書きの発表文や日記に見られるだけである。

「理科」は１・２年生の「生活」を踏まえて、３年生から始まる教科である。３年生の教科書では本文は丁寧体で書かれ、分かち書きは使われていない。見出しや

実験・観察の指示文には本文と違って常体が使われている。４年生以降の教科書では本文は常体であるが、資料は丁寧体で書かれている。また、児童に興味を持たせるためか漫画風のキャラクターが使われ、その言葉は話し言葉で、終助詞が多用され、文の省略も多い。題や見出しは「もののあたたまりかた」のように体言が多くなる。

「社会」は、１・２年生は「生活」として学ばれ、３年生から「社会」の勉強が始まる。３年生から６年生まで、カラフルな写真や絵、図表がすべてのページに掲載されていて、児童に学習意欲をもたせる構成となっている。本文は丁寧体で、分かち書きは使われていない。見出しの部分、単元の内容を補助する資料、児童によるレポート、メモ等では常体が用いられている。漫画やキャラクターの会話の部分は話し言葉で書かれている。

「算数」「理科」「社会」の教科書では、一つの教科書の中に書き言葉、話し言葉、丁寧体、常体といくつものスタイルが使われている。これは日本語母語話者である日本人の子どもたちには教科書に親しみを持たせることになると思われるが、非母語話者の外国人児童にとっては複雑でわかりにくいことになる。

４．教科、学年別教科書に現れる文型一覧

全教科書を読み、言葉の意味を辞書で調べただけでは文意が読み取れないようなものを取り上げ、それを文型項目と名づけた。研究者によっては文型に含めているものであっても語句の意味がわかれば文意がとれるもの（例：ごとに、ずつ）は文型項目から除外した。動詞や形容詞の活用形は文型とは言えないが、項目に含めた。

一つの教科の１学年の教科書に１回でも出現した項目には「○」を記した。また、従来からの日本語教育では初級・中級文型だと考えられている項目の必要度（不必要度）も調査するため、それらの項目も調査項目に含めた。ただし、紙幅の制限上、どの教科書にも出てこない項目は表には入れていない。

＜教科書文型一覧表＞

N＝名詞　V＝動詞　A＝形容詞

		算数						生活	理科				社会		
No.		1年	2年	3年	4年	5年	6年	1･2年	3年	4年	5年	6年	3･4年	5年	6年
	『名詞』														
1	NかN	○							○			○	○		○
2	Nが（主格）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3	Nが（好悪、巧拙の対象）							○					○		
4	Nから（起点）	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
5	NからNにかけて									○			○		
6	Nしか		○		○		○			○					
7	Nだ	○	○	○	○		○				○		○	○	○
8	Nだった				○		○						○		○
9	Nって			○										○	○
10	Nで（場所）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11	Nで（手段）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12	Nで（基準）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
13	Nで、（中止形）			○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
14	Nである			○		○				○	○	○		○	○
15	Nでした			○	○	○				○		○	○	○	○
16	Nです	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
17	Nではない（Nじゃない）			○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
18	Nでも(譲歩)		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
19	Nと（相手）		○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○
20	Nと（定義）		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
21	NとN（追加）	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○		○
22	NとかN						○				○				
23	Nとして			○	○	○	○			○	○	○	○	○	○
24	Nとともに									○		○	○	○	○
25	Nとも			○		○									
26	Nなら			○											
27	Nに（存在場所）	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
28	Nに（時間）			○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
29	Nにする					○		○			○		○		○
30	Nに（相手）	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
31	Nに（方向）	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○
32	Nに（着点）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
33	Nに（変化）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
34	Nに（形）	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○		
35	Nに（基準）	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
36	Nに関して（関する）													○	○
37	Nにしたがって		○			○							○		
38	Nに対して												○	○	○
39	Nについて		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
40	Nにつれて					○				○	○				
41	Nにとって											○	○		○
42	Nにともなって						○					○		○	
43	Nによって（よる）					○	○		○	○	○	○	○	○	○
44	NのN（修飾）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
45	Nの（所有物）								○						
46	Nのこと		○				○		○		○		○		
47	Nのほう（比較）			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
48	Nのまま									○		○			

		算数						生活	理科				社会		
No.		1年	2年	3年	4年	5年	6年	1･2年	3年	4年	5年	6年	3･4年	5年	6年
49	Nは（主題）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
50	Nへ	○	○		○	○	○	○		○	○		○	○	○
51	Nまで	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○
52	Nまでに		○			○					○		○	○	○
53	Nみたい												○		
54	Nも（補足）		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
55	Nも（強調）		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
56	NやN	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
57	Nより（比較）	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	○
58	Nを（目的語）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
59	Nを（出発点）			○										○	
60	Nを（通過点）			○	○	○	○			○		○	○	○	○
61	N(形, 色, におい)をしている			○	○	○									
62	Nをもとに										○	○	○	○	○
	『連体修飾』														
63	～N	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	『名詞化』														
64	こと		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
65	の（ん）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	『動詞』【辞書形】														
66	V（指示）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
67	V（事実）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
68	Vことがある		○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	
69	Vことができる		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
70	Vことにする					○							○	○	○
71	Vことになる		○	○		○	○						○		○
72	Vため（目的）				○								○		○
73	Vとよい		○		○		○		○		○		○	○	○
74	Vにつれて									○		○			
75	Vには（目的）		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		
76	Vのに（目的）			○	○	○	○				○				
77	Vほど								○	○	○	○	○		○
78	Vまえに		○	○	○	○		○		○		○	○	○	
79	Vまで					○			○	○	○	○			
80	Vまでに			○											
81	Vように（目的）	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
82	Vように（変化）		○				○	○	○	○	○	○	○	○	○
83	Vようにする												○	○	○
	【意志形】														
84	Vう／よう（意志）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	【タ形】														
85	Vた	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	Vたあと		○					○	○	○	○	○	○		
87	Vたことがある			○	○			○				○	○	○	
88	Vたことになる						○								
89	Vたほう	○		○											
90	Vたばかり									○	○		○		
91	Vたほうがいい												○		
92	Vたまま								○	○	○		○		○
93	Vたらよい				○	○				○	○	○	○	○	
94	VたりVたりする			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

		算数						生活	理科				社会		
No.		1年	2年	3年	4年	5年	6年	1･2年	3年	4年	5年	6年	3･4年	5年	6年
	【テ形】														
95	Vて（順序）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
96	Vて（方法）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
97	Vて（理由）			○	○				○	○			○	○	○
98	Vてあげる							○					○		
99	Vてある	○	○	○	○		○		○		○		○		○
100	Vていただく												○	○	○
101	Vていく（空間）	○			○		○	○		○	○		○	○	○
102	Vていく（時間）		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
103	Vている（進行）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
104	Vている（結果）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
105	Vておく		○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	
106	Vてから		○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○
107	Vて（ください）		○		○			○					○	○	○
108	Vてくださる												○	○	○
109	Vてくる（空間）					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
110	Vてくる（時間）					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
111	Vてくれる					○		○					○	○	○
112	Vてしまう（ちゃう）		○			○	○			○		○	○	○	○
113	Vてはいけない								○	○	○	○	○		○
114	Vてほしい												○		
115	Vてみる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
116	Vても		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
117	Vてもよい（Vてよい）			○	○		○		○	○	○	○	○		
118	Vてもらう			○		○		○					○	○	○
119	Vてやる												○		
	【ナイ形】														
120	Vず（中止形）								○				○	○	○
121	Vずに			○			○			○		○	○	○	○
122	Vない（否定）		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
123	Vない（指示）								○	○	○	○			
124	Vないで（ください）		○			○		○		○			○		
125	Vないように（目的）				○		○		○	○	○	○	○	○	○
126	Vないようにする			○		○		○	○	○	○	○	○		○
127	Vなくても		○		○				○			○			
128	Vなくなる						○	○	○	○	○		○	○	○
129	Vなければならない										○	○		○	○
	【バ形】														
130	Vばよい			○	○	○	○				○		○	○	○
	【マス形】														
131	V（中止形）		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
132	V方（方法）		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
133	Vたい			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
134	Vながら		○		○				○	○	○	○	○	○	○
135	Vに行く／来る			○				○						○	
136	Vました	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
137	Vましょう	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○
138	Vます	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
139	Vません				○	○	○			○			○	○	○
140	Vませんでした												○		○

		算数						生活	理科				社会		
No.		1年	2年	3年	4年	5年	6年	1･2年	3年	4年	5年	6年	3･4年	5年	6年
	【命令形】														
141	Vれ	○						○							○
	【可能形】														
142	Veる／られる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	【受身】														
143	Vられる		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
	【使役】														
144	Vさせる		○	○	○			○	○		○	○	○	○	○
145	Vさせてもらう（いただく）							○					○		
	『形容詞』														
146	イAい	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
147	イAいです		○												
148	イAいN	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
149	イAいように（目的）			○											
150	イAかった				○			○	○				○		○
151	イAかったです								○				○		
152	イAく（中止形）				○	○		○	○	○	○	○	○	○	○
153	イAくV	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
154	イAくて（中止形）				○								○	○	
155	イAくても			○	○				○				○		○
156	ナA（だ）				○		○	○					○	○	○
157	ナAだった								○						
158	ナAで（中止形）									○	○		○	○	○
159	ナAです		○	○	○	○	○	○					○	○	○
160	ナAでした												○		
161	ナAなN	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
162	ナAにV	○		○				○	○	○		○	○	○	
	『文をつなげる形』														
163	あるいは									○					
164	～か（選択）										○				
165	～が（逆説）			○	○		○		○	○	○		○	○	○
166	～から（理由）		○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○
167	～けれども（けど）		○	○	○		○	○	○	○			○	○	○
168	～し（接続）						○			○	○		○		○
169	しかし						○				○		○	○	○
170	すると										○				○
171	そこで									○	○		○	○	○
172	そして										○	○	○	○	○
173	それから												○		
174	それとも									○	○	○			
175	ただし						○								
176	～ため（に）（理由）									○	○	○	○	○	○
177	～たら	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
178	だから												○	○	
179	つまり												○		
180	でも												○	○	○
181	では				○		○								
182	～と（条件）	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
183	～と（引用）		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
184	～とき			○	○		○		○	○	○	○	○	○	

		算数						生活	理科				社会		
No.		1年	2年	3年	4年	5年	6年	1･2年	3年	4年	5年	6年	3･4年	5年	6年
185	ところが											○			○
186	～としたら									○		○			
187	N／V～とすると				○		○								
188	～なら											○			○
189	～ので		○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○
190	～のに				○		○			○	○		○	○	○
191	～のは（主題化）				○		○		○	○	○	○	○	○	○
192	～ば		○										○	○	○
193	～ほど				○										
194	また	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○
195	または				○								○		
	『文末の形』														
196	～か（疑問）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
197	～かな（疑問）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
198	～かな（願望）	○			○				○						
199	～かもしれない（予想）											○	○		
200	～からだ			○					○	○	○	○		○	○
201	～こと（指示）			○	○										
202	～そうだ（様子）		○		○		○	○			○		○	○	○
203	～そうだ（伝聞）	○		○	○	○	○						○	○	○
204	～ぞ							○					○		○
205	～だって（伝聞）												○		
206	～だろう						○		○	○	○	○	○	○	○
207	～でしょう	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	
208	～とする（規定）			○	○	○	○				○	○			
209	～な／なあ（感嘆）				○	○							○		○
210	～な／なあ（願望）			○	○			○	○		○		○	○	○
211	～な／なあ（疑問）							○							○
212	～なんて												○	○	○
213	～ね（同意）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
214	～の（疑問）				○	○							○		
215	～のだ（断定）		○			○						○	○		○
216	～のね												○	○	○
217	～もん							○					○		
218	～よ	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
219	～ようだ（様子）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
220	～らしい（様子）												○		
221	～わ	○			○	○									
222	～わけだ												○		

5．共通文型 75

まず、各教科の教科書の文型の特徴を述べる。

(1) 算数

・文型の数が限られている。

・新しい単元に入るとき、問いかけの形「～のかな」「～でしょうか」等が使われることが多い。

・作業を促すときに、「Ｖましょう」の形が用いられる。

・ゲームや作業手順を伝える際には、「2 つ進む」のように動詞の辞書形が指示の語として用いられる。

・接続詞が非常に限られており、全学年を通じて頻繁に用いられているのは「また」だけである。

・後置詞では、「について、として」がよく使われる。

(2) 生活

・「おしえて　あげるよ」「たのしいね」「どんな　あじかな」のように終助詞を伴った話し言葉が多く使われる。

・１文の長さは短いが、使役、受身、待遇表現、動詞テ形を用いた文型、連体修飾節等さまざまな種類の文型が出ている。「おねえさんの　いすに　すわらせて　もらったよ」のように使役と待遇表現の組み合わさった高度な文型も出ている。

・動詞の辞書形が作業手順を示す指示の語として用いられる。

(3) 理科

・疑問をもって観察したり、実験したりさせるため、「どのように育っていくのだろうか」「いつごろ咲くだろうか」のように「疑問詞＋だろうか」の文型が多い。また、「大きくなるのかな」のような疑問形も多い。

・「たしかめよう」のように動詞の意志形で行動を促す文型が多い。

・動作の手順を示す指示文では「種をまく」のように動詞の辞書形が使われる。

・実験等での禁止事項を示すために「Ｖてはいけない」「Ｖないようにする」の文型が多い。

・「Ｖていく」「Ｖてくる」「Ｖようになる」「イＡくなる」など変化を表す文型が多い。

・「空気が暖められると」のように、動作主よりも事柄に視点を置く客観的な表現が多いため、受身形が多い。

・後置詞では、「について」がよく使われる。

(4) 社会

・文型の数や種類が多い。また、使役、受身、待遇表現、動詞テ形を用いた文型等が組み合わされた複雑な表現が用いられる。
・見学や体験、インタビュー等学校外の人と触れ合う場面が多いため、教科書の中にも敬語等待遇表現が用いられる。
・調べ学習の作業手順を示すとき、辞書形が指示の語として用いられる。
・調べ学習の報告のときに、伝聞の形がよく用いられる。
・歴史では、過去形や「Vてくる」「Vように」等の変化を表す文型がよく用いられる。
・後置詞の中では、「に関して／関する、に対して、について、をもとに」が多く用いられる。
・接続詞の中では、「しかし、でも、そして、それから」が多く用いられる。

次に各教科書に共通な全体的な特徴を述べる。

判定詞「Nです」はよく用いられるが、否定形「Nではありません」はほとんど見られず、過去否定形「Nではありませんでした」はどの教科書にも出てこない。また、「Nではない」は「生活」や「算数」の低学年を除いて使われているが、過去否定形の「Nではなかった」はどの教科書でも使われていない。

動詞は、「Vます、Vません、Vました」は用いられているが、「Vませんでした」は「社会」以外ではない。動詞の辞書形、意志形は文型の中ではなく文末にそのままの形（例：水を入れる、調べよう）で使われることが多い。

イ形容詞は叙述形と名詞修飾形の両方ともよく使われているが、否定、過去、過去否定はどの学年にも出てこない。イ形容詞の副詞的用法である「イAく」はすべての学年でよく使われている。同様に、ナ形容詞も名詞修飾形はすべての学年に出てくるが、叙述形は「理科」の教科書には出現せず、否定、過去否定はどの学年にも出てこない。

連体修飾節は「生活」を含め、すべての教科書のすべての学年で使われている。また、名詞化の「こと」や「の」もよく使われている。受身や可能の形も多くの教科書に出現する。特に理科では自然現象を表すために非情の受身がよく使われている。

従来からの日本語教育において初級文型だと考えられている項目のうち、待遇表現（Vてあげる／くれる／もらう）は「生活」と「社会」を除き、使われていない。それも身近な人との関係を述べるときに限られている。また、気持ちを表す表現

（例：好き／嫌い）や不確定な推測表現（みたい、かもしれない、らしい）も「生活」と「社会」に少し現れる程度である。

次に、上記の一覧表の項目のうち、全 14 学年中 11 学年以上に出現した項目を抽出すると 75 項目ある。それを「共通文型 75」として見やすいように分類すると以下のようになる。このうち、『いっしょにほんご』の中で指導項目として取り上げられている 32 項目には＊が記してある。

① 名詞に続く助詞、後置詞、判定詞（31）

＊が（主格）、＊から（起点）、＊で（場所）、＊で（手段）、＊で（基準）、で（「だ」の中止形）、＊です、ではない、でも（譲歩）、＊と（相手）、＊と（追加）、と（定義）、＊に（存在）、＊に（時間）、＊に（相手）、に（方向）、＊に（着点）、＊に（変化）、に（形）、に（基準）、について、＊の（修飾）、のほう（比較）、＊は（主題）、＊へ（方向）、＊まで（終点）、＊も（補足）、も（強調）、＊や（並列）、＊より（比較）、＊を（目的語）

② 連体修飾節（1）

③ 文の名詞化（2）

こと（名詞化）、の（名詞化）

④ 動詞・形容詞の活用に関するもの（15）

Ｖ辞書形（指示）、Ｖ辞書形（事実）、Ｖ意志形、Ｖた（過去）、Ｖて（順序）、Ｖて（方法）、Ｖない（否定）、Ｖ中止形、＊Ｖました、＊Ｖましょう、＊Ｖます、＊イＡい（終止形）、イＡい（連体形）、イＡく（連用形）、ナＡな（連体形）

⑤ 表現文型（14）

Ｖことができる（可能）、Ｖように（目的）、ＶたりＶたりする、Ｖていく（経過）、＊Ｖている（進行）、Ｖている（結果）、Ｖておく（準備）、Ｖてから（順序）、Ｖてみる（試み）、Ｖても（譲歩）、Ｖかた（方法）、＊Ｖたい（希望）

～でしょう（推量）、～ようだ（様態）

⑥ 受身、可能の表現（2）

Ｖられる（受身）、Ｖられる（可能）

⑦ 複文を構成するもの（5）

から（理由）、＊たら（条件）、と（条件）、＊と（引用）、ので（理由）

⑧ 接続詞（1）

また

⑨ 終助詞（4）

＊か（疑問）、かな（疑問）、＊ね（同意）、＊よ（表示）

6．おわりに

教科書の文型調査の結果を「教科書文型一覧表」にまとめたが、それをまとめるにあたっては、次に示すような困難な問題があった。

一つは、項目を形でまとめるか、機能でまとめるかというまとめ方の問題である。どちらかに統一することは難しく、両者が融合した形になっている。例えば、「様子」の意を表す「そうだ」「ようだ」は形容詞や動詞に接続する（「Nのようだ」を含む）ので、「教科書文型一覧表」では『文末の形』にまとめてある。ただし、実際は文末だけでなく、文中に「そうな」「そうに」「ような」「ように」の形でも出現する。また、判定詞「だ」「です」はそれ自体に活用がある上に、名詞、ナ形容詞に接続するので、それぞれの項目で取り上げている。一方、「だろう」「でしょう」は、それ自体は活用しないので、『文末の形』で取り上げている。

二つ目は、どこまで細かく分類するかという問題である。「教科書文型一覧表」では、従来の日本語教育の分類基準を参考に分類したが、子どもたちに指導する場合には、正確さを期し、細かく分類すればいいというわけではない。指導にあたっては、子どもたちの理解、認識にそった分類が重要となろう。例えば、「に」は（存在場所）（時間）（基準）（相手）（方向）（着点）（変化）（形）と８つに分類しているが、このうち（相手）（方向）（着点）（変化）（形）は、（行為・作用の向かう方向）として１つにまとめることもできるだろう。また、「Vている」の意味を（進行）と（状態）に分類したり、「も」を（補足）と（強調）に分けたりしているが、このような分類が指導上有効かどうかは今後の検討課題である。

教科指導のために優先して指導すべき文型の候補として「共通文型 75」を選び出したが、教材開発する上での課題として以下の２点を指摘したい。

第１は、一つの教科書にはいくつものスタイルが使われているが、どこまでを日本語指導の対象とするかという問題である。今回調査した教科書には、漫画やキャラクターの吹き出しが随所に見られた。吹き出しは話し言葉で、縮約形や終助詞等が多く使われている。このような教科書を、小学校の教師は教室でどのように使っているのだろうか。教科によっては教科書を全部読まなかったり、漫画やキャラクターの部分を省いたりしているようだ。ポスト初期指導で何をどこまで指導すべきかはさらに検討を要する。

第２は、各教科に共通して現れる文型を「共通文型 75」として抽出しているが、教科によって重要な文型が異なることである。例えば、伝聞の意味を表す「そうだ」は「生活」や「理科」では例が見られないが、「算数」「社会」ではほぼ全学年で用

いられる。ポスト初期指導の教材化に向けて、このような教科に独特の文型をどう扱うかは課題である。

以上、多くの課題を抱えているが、今後、「共通文型 75」をもとに、子どもたちに教えるという視点、指導上の観点を重視し、教科学習に役立つ教材開発を行っていきたい。

付記：本研究は平成 16 年度の科学研究費補助金（「教科学習につながる外国人児童用日本語指導教材および教材の開発」代表者：横田淳子）を得て行われた。なお、調査結果のデータ処理に関しては、清水まさ子氏の協力を得た。

参考文献

岩沢昌子・高石久美子（1994）「『算数』の教科学習を助ける日本語テキスト試案」『日本語教育』83 号

グループ・ジャマシイ（2001）『日本語文型辞典』くろしお出版

田山のり子・酒井順子（1998）「教科書の語彙調査」『外国人児童生徒のための日本語指導第２分冊』ぎょうせい

中尾桂子（1999）「小学校検定教科書の構文調査―外国人児童の教科学習支援のための基礎研究―」『小出記念日本語教育研究会論文集』7

――――（2000）「児童に対する日本語教育の内容について―小学校教科書の文型調査から―」『2000 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』

姫野昌子（1998）「小学校高学年・中学校用日本語指導カリキュラム・ガイドライン―教科学習のために―」『外国人児童生徒のための日本語指導第 1 分冊』ぎょうせい

横田淳子（2003）「外国人児童に対する日本語教育のあり方」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』29 号

――――（2004）「小学校での教科学習のための日本語指導のあり方」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』30 号

横田淳子・小林幸江（1998）「小学校用日本語指導カリキュラム・ガイドライン―適応場面を利用して―」『外国人児童生徒のための日本語指導第 1 分冊』ぎょうせい

――――――――（2002）『いっしょににほんご』スリーエーネットワーク

横田淳子・小林幸江・鈴木孝恵（1999）「外国人児童に対する初期日本語教育の文型」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』25 号

Japanese Sentence Patterns for Non-native Children to Study Content -area Subjects at Elementary School

YOKOTA, Atsuko KOBAYASHI, Yukie

In order to make non-native children acquire academic Japanese language proficiency, we have found out that it is more effective to teach sentence patterns rather than vocabulary. Vocabulary in textbooks of content-area subjects is large, varying with subjects and grades, whereas the number of sentence patterns is limited and most of them are common to all textbooks.

Sentence patterns used in textbooks of content-area subjects at elementary school have been thoroughly examined by the authors. The series of textbooks of four subjects, namely "mathematics," "life (*seikatsu*)," "science" and "social studies" were selected from grade 1 to grade 6. Concerning the style of textbooks, it is pointed out that all textbooks have written language and spoken language, and that formal forms as well as informal forms are used in the same textbook. This means that the textbooks sometimes become too complicated for non-native children to understand.

The findings on sentence patterns are as follows:

1 Although "*desu*" is commonly used, a negative form "*dewa arimasen*" is seldom used. A past negative form "*dewa arimasen desita*" is not appeared in any textbooks.

2 The dictionary and volitional forms of verbs are often appeared at the end of sentence rather than in the middle of sentence.

3 Adjectives are used in the end of sentence and in front of nouns, but negative forms, past forms and past negative forms are not used.

4 A clause that modifies a noun is widely used.

5 Nominalization using "*koto*" and "*no*" is often used.

6 The passive voice is used well, especially in the textbooks of "science."

7 The sentence patterns that express personal relationship like "V*te ageru/kureru/morau*" is not used except in the subjects "life" and "social

studies."

8 The sentence patterns that express personal feelings like "*suki,*" "*rasii,*" and "*kamosirenai*" are not used except in the subjects "life" and "social studies."

Altogether 75 sentence patterns are designated as common sentence patterns. Out of 75, 32 were already taught as teaching items in the textbook, *Isshoni Nihongo,* that was published in 2002 by the authors.